

農事組合法人 One / 石川県

# れんこん栽培で 地域の未来を明るく

手間も時間もかかるれんこん栽培を、各地の技術の研究で効率化に成功。  
町の事業に発展させたいと、情熱をそそぐ若手農家の熱い思いとは――。

取材・文／岸田直子 撮影／原田圭介



毎年 One 主催で行う、稲の収穫体験。子どもたちの元気な声が響き渡る。



土中のれんこんを掘り出し、水で泥を落とす収穫作業。

休日は夫婦揃って  
子どものサッカーを応援！



「以前は野球が趣味でしたが、今は休みにになると長男・聖也のサッカーの応援へ。夫婦揃って楽しんでいます」。



One の代表で、稲作を担当する兄の一人さん。



一船は約80kg。この日は2人がかりで320kgを収穫。「表面の赤褐色は『赤さび』と呼ばれ、新鮮な証です」と宮野さん。



One で6年修業したのち、独立した島大輔さんと。つらい時代を一緒に乗り越えた大切な仲間。

## 荒れ地を開墾、 ひたすら技術を学ぶ

早速、資金を借り入れて1haの元れんこん畑を購入。ヨシやガマなどの雑草が一面に生い茂り、トラクターを入れることもできない荒れ地を、手作業で開墾する日々が始まりました。そうして除去した雑草はなんと2トトラックで100台分！「黙々と作業をする主人の背中を見ていて、切なくなりました」と沙知さんは当時を振り返ります。

でも、その姿を見た近くのれんこん農家が、栽培中のれんこん畑0.5haを貸してくれたおかげで、自家採種が可能になったのです。2年目は車を売って肥料代と生活費にし、なんとか軌道に乗ったのは3年目のことでした。

土中で生育するれんこんは、葉の状態を見ただけで生育状況を見極め、施肥・害虫防除をしなければなりません。その点でも宮野さんは、持ち前の情熱で茨城や徳島、愛知などれんこんの主な産地を訪ねては栽培技術を勉強。何事も「やってみなければわからない」精神で、土や水の研究を重ね、稲を育てる水田での栽培にも成功。確実に売り上げを伸ばしていったのです。

### Profile

#### 宮野義隆さん、沙知さん

義隆さんは1980年生まれ。2003年に実家で就農。2007年にれんこん栽培を始め、2013年に兄とともに農事組合法人 One を設立。沙知さんは1984年生まれ。2005年に義隆さんと結婚。3男1女を育てながら夫を手伝う。農業女子プロジェクトのメンバーとしても活躍。  
所在地／石川県金沢市才田町は25-1  
<http://www.one2013.com/>

2013年、宮野さんは兄の稲作とれんこん部門と一緒にした農事組合法人 One を設立。凍える寒さの中、一緒に作業している仲間の将来がふと気になったのが、その理由です。法人化すれば、年金などの福利厚生を提供することができ、社員は老後の心配なく家族を養っていきます。

「おいしいものを作って、『ありがとう』と言ってももらえる、こんな幸せな仕事はありません。One の目標は、農業を、地域を支える産業にすること。そのためには、雇用の受け皿になる必要がある」これまで各農家が独自に行っていた栽培法をマニュアル化し、新規就農者も確実に暮らしが成り立つ仕組みをつくる。そして、れんこんで才田町を、日本を幸せにしたい！若く熱い農家の夢は、果てしなく広がっています。

## 農業で、才田町を 日本を幸せに！

先の見通しがよくなる、と正月の縁起食材として欠かせないれんこん。「金沢のれんこんは、穴が小さいので実が詰まっています。甘みやうまみ、粘りが強いのが特徴です」と語るのは、農事組合法人 One の副代表・宮野義隆さん。金沢市才田町でれんこん栽培に取り組む、急成長を遂げています。

16歳から大工の仕事をしていたが、23歳のときに父親が病気で倒れたことから、兄と母を手伝う形で就農。しばらくは稲作に取り組み、たい肥として提供していた稲のぬみ殻をれんこん農家に配達に行ったときのこと。「泥まみれになって汚ねえなあ。こんな仕事したくねえわ」。そう言い放つ宮野さんに返ってきたことばが「試しに掘ってみい」。実際に掘ってみると――おもしろい！収穫期間が8月から翌年5月ごろまでと長く、冬に手が空く稲作と両立できるのも魅力でした。

そこで、河北潟干拓地でれんこん栽培に取り組むことを決意。妻の沙知さんも農業未経験ながら「子育てをしながら夫婦一緒に働ける」と大賛成。父も「おまえがそう言うのを待っていた」と喜んでくれました。

## 「泥まみれ」の印象が 掘ったら「おもしろい！」

れんこん畑にて。長女・愛々（ら）ちゃんと次男・来風（らいお）くん、三男・太寿（だいじゅ）くんと宮野さん夫妻。